遺言

第 5 期生　石川 大二郎

「学生時代からの友人は，損得感情抜きで付き合えるから，一生の友になる。」とはよくいったものですが，どうでしょうかね？ 僕はみんなにとって一生付き合いたいと思えるような友人だったでしょうか？もしそうであったなら，本当に喜ばしい限りです。ありがとうございます。

ゼミでの 2 年間を振り返るという問題意識のもと，本論を書き進めていくわけですが，僕は基本的に過去を振り返らない人間であり，常に未来のことを見据えています。ですが，小野ゼミで過ごした日々は鮮明に記憶に残っていて，とても密度の濃い時間を過ごしていたんだなあと改めて実感しています。

僕は本当に小野ゼミのみんなのことが大好きです。どのぐらい好きかというと，実家に帰った時も，高校の同窓会でも，小野ゼミのみんなの話をするぐらい好きです。みんなは僕の自慢の友達であり，尊敬できる人達ばかりでした。そして，自分がそんな集団の一員であるという事実は，僕の大学生活において唯一の誇りであり，アイデンティティでした。それは，アイデン＆ティティでもあり，欧陽菲菲でもありました。

大学でのゼミ生活を通じて，プレゼンテーション能力や忍耐力，社会性などの向上が得られるということを，折りに触れて耳にします。しかし，これらの能力がどう成長したかと問われれば，正直に申し上げて自分ではよくわかりません。ただ，僕はもっと大切なものを得ることができました。それは，紛れもなく，愛すべき仲間たちです。苦楽を共にして信頼関係を構築した仲間というものは，本当にかけがえのない財産であると思います。仮に将来どれだけ金を失って，地位を失って，誇りを失っても，この財産だけは失いたくないものです。

おじいちゃんが言っていました。真の友人関係というものは，意識して作るのではなく，共に日々を過ごす中で無意識に形成されていくものである。そうであるからこそ，別れも意識しないうちに突然やってきてしまうのだ。だから，今，一緒にいられる時間を大切にしなさい，そうすれば，その友人関係は一生切れることのないものになる，と。僕はみんなと，そんな関係を構築することができたと勝手に自負しています。

最後になりますが，小野先生には本当にたくさんのことを学ばせていただきました。僕が愚かであったばかりに，最近になって気づいたことがあります。僕は小野先生をポーカーフェイスで，あまり感情を表に出さない人であると思っていました。違いました。小野先生は，常に僕たちゼミ生に対する「愛情」という感情で溢れていました。先生が一流の「研究者」であるかどうかは，僕なんかが評価を下すことではないですが，先生は間違いなく超一流の「教育者」です。その点については，教育をしていただいた僕が一番身にしみて実感しているはずです。2 年間という短い時間ではありましたが，本当にありがとうございました。